

2023年4月号

一般社団法人 被曝と健康研究プロジェクト

<http://hibakutokenkou.net/>

今フクシマの声を

第2集



311子ども 甲状腺がん 裁判

東京電力福島第一発電所の事故によって放出された放射性物質によって被曝し、甲状腺がんになった若者が東京電力を訴えています。応援してください。

ホームページ

311甲状腺がん子ども支援ネット | 🔍

<https://311support.net>



上記団体へのご寄付： ゆうちょ銀行 店名 〇一九 当座 口座番号 0393240
姓名、メールアドレス、寄付名義人=自身、団体、匿名など記入。詳しくはHPに。

いま、フクシマが忘れ去られようとしている。

政府は、「フクシマの教訓」と言いつのって、

放射線の被曝基準 年間1ミリシーベルトを無きものにし、

廃棄物を海洋に投げ捨て、原発の再稼働、新設を行おうとしている。

メディアも、ほとんど報道を忘れた。

いま、フクシマの声を聴くべきではないのか。

甲状腺がんに苦しみ、裁判に訴えた勇気あるフクシマの若者の声を聞いてほしい。

7人の口頭弁論陳述を順次紹介する。第2集（編集責任・田代真人）

一般社団法人「被曝と健康研究プロジェクト」役員

顧問

有馬理恵 劇団俳優座女優

石塚健 医師

沢田昭二 名古屋大学名誉教授、理論物理、内部被曝研究者

曾根のぶひと 九州工業大学名誉教授

玉田文子 医師

西尾正道 北海道がんセンター名誉院長

本行忠志 大阪大学医学系研究科教授

松崎道幸 道北勤医協ながやま医院

矢ヶ崎克馬 琉球大学名誉教授

代表理事 田代真人 ジャーナリスト

理事 浅野真理、住田ふじえ

監事 三宅 敏文

「LETTER」の内容についてのご意見は下記へお寄せください。

一般社団法人 被曝と健康研究プロジェクト 代表 田代真人

〒325-0302 栃木県那須町高久丙4 0 7 - 9 9 7

Eメール：masa03to@gmail.com

同封の振替用紙は、当法人へのご寄付用です。よろしくお願ひ致します。

意見陳述要旨 2022年11月9日 原告5

私は、文章でも、言葉でも、自分が思っていることを伝えるのがもともと得意ではありません。

裁判を起こす前、私は、裁判は1回で終わるものだと思っていました。意見陳述も、誰か一人が代表して読むんだと思っていました。

だから提訴後に、原告で色々な話し合いをして、原告全員が意見陳述しようとなったとき、正直おわたたな一と思いました。

でも2回、裁判所に来て、自分の辛い経験を話すほかの原告を見て、同じ病気になっても、みんな一人ひとり、全然違う。自分もやらないわけにはいかないと思いました。

私は、昔のことはよく覚えているのに、最近のことはあまり覚えていないし、内容も、文章も、自信はありません。

弁護士さんと毎週のようにラインで話し合いをして、少しずつ思い出しながら、陳述書を作りました。

この陳述書は、私がこれまでに書いた中で、一番長い作文です。最後まで嘸まずに、読みたいと思います。

1 被ばく

震災があったのは中1の時です。

その日は、先輩の卒業式があり、学校の終わりが早かったので、セブンでお昼ご飯を買い、友達家で食べつつ、遊んでました。私も友達もおでんを買ってたのを覚えています。

丁度、おでんを食べてた時に携帯のサイレンがなり、地震が起きました。携帯のサイレンを聞くのも、あんなに大きな地震にあうのも初めてでみんな大慌てで外に避難しました。

外は吹雪いていて、この世の終わりだなと感じ、友達と話した記憶があります。

それぞれの家族に連絡を取り終えて、また、友達家に入り、ニュースをつけると「震度6」という数字が目飛び込んできました。津波の映像が流れてきて、それを見た友達が泣いてるのを見て、やっと、この状況がとても酷いことなのだと把握しました。

原発事故は、伯母が、放射能をととても気にしてたので、よく覚えています。放射能は、気にする人と気にしてない人の差が激しくて、自分は、気にしてない方の側だったので、何も変わらず、ノー天気暮らししてました。

爆発映像は、流し見程度でしたが、風評被害とか、福島へのあたりの強さとか、どんどん状況がひどくなっている印象でした。

2 学校生活

学校は、休みが少し長引きました。新学期が始まっても。ちょっと落ち着かない感じでした。

避難をする生徒が何人かいて、その中に私の友だちもいました。そのショックもあったのか、どんどん学校に行く頻度が低くなりました。それが、だんだん本格的に不登校になりました。

不登校になっても、部活の方には顔を出していました。学校には行くのは放課後です。部活が終わっても帰らず、校門付近や公園で駄弁っていて夜遅くまで学校にいて先生に注意された。

放射能を気にする友達が私の周りに居なかったのが、普通に遊んでました。雨が降ってもそれに当たりながら帰った。外に出かける時、持って歩くようにと学校から渡された数値を測る機械も身につけず、家に放置してた。

でも、伯母はとても気にしてて、いつか身体に影響が出るのだなー感じながらもどこか自分は大丈夫と思っていたような気がします。

自分の家族もそこまで気にする感じではなかったのが、遊びにも普通に行っていました。

地元より安いからという理由で、週末に友達と、電車で須賀川に行きイオンタウンのプリクラを撮りに行くという謎の行為をしていた。プリクラより交通費の方が高かった。

不登校中は、市役所近くの不登校になってしまった子がくるところに通っていてバスで行ってたり、車で送り迎えしてもらったり長い時間をかけて、歩いて帰ったりもしました。

3 診断

不登校だったので、学校では一度も、甲状腺のエコー検査は受けていません。自宅に通知が来ても 2 回ぐらい拒否していた。特に理由もなく、めんどくさい、する必要はないと思っていたのだと思う。

3 回目くらい目の通知で、「これが最後」みたいなことを親から聞かされ、「最後なら行くか」のノリで受けた気がします。

エコーを取り終えた時、何故か、癌があるんじゃないのかなと勘が働いてました。それを親にも言ってます。

案の定、再検査の通知が来ました。

福島医大での再検査でした。細胞診の首に刺す針は最初、とても怖く感じました。痛みには強い方ですがこの時は恐怖でした。針の痛みより、押されてるのか、刺さってる圧なのか、見えなくてよくわかりませんでした。針の痛みではない痛みの方が強かったです。

それを何故か 2 回受けた記憶があります。

そのあと、癌と診断されました。最初のエコーの時点で癌だと思っていたので、なんとも感じませんでした。でも母は泣いていたのか、ショックを受けていた。福島医大の通院はとても憂鬱でした。

まず医大に着くのに車で 1 時間ちょいはいかかり、そこからさらに診察されるまでに 2~3 時間ぐらい待っていて憂鬱でしたなかったです。

暗い廊下で、ずっとうつむいたまま。

覚えている光景は、自分のイヤフォンの有線です。

聞いていた曲は多分、ボカロとか、ラッドウィンプスとか、米津玄師とか。でも、よく覚えていない。

待っている時に、カウンセラーの人なのか、話しかけてくれる先生がいましたが、きっとあの時はイライラずっとして、時に態度がよろしくなかった日もあったと思います。

今思うと本当申し訳ないなと、その方に思います。

診察時にもイライラしました。ちょっと気になる事があって母に聞くと、母が代わりに先生に聞いてくれました。その度に、先生の「大丈夫だから、心配なんだね？」みたいな表情とか言動が本当にイライラさせてくれました。

そんなことはどうでも良いので、待ち時間を減らしてくれないかと余計にイライラしてました。

どれぐらいの頻度で通院していたのかは記憶なし。採血は慣れた。

最初はこんなにとるの？という驚きがあったけど、今は、「こんぐらいだよね」という慣れです。でも、いまでも、病院は好きになれない。病院の空間自体が。待っている人だけがいる場所だから。

4 手術

手術は誕生日でした。

自分の記憶してる限り、誕生日は天気が悪い雨とかだったのに、その日は晴天でした。

手術はするのは先生ですが、やっぱり手術ってなると、めんどくささや不安があり嫌だった。

今もできるなら、もうしたくはない。

でも、全身麻酔は経験できて良かった。自分の意志と関係なく、意識がなくなる・・・。

死って、こんな感じなのかなと思う。手術の傷はずいぶん大きかったけど、切り取った物が見れなくて残念だった。

退院後はまた通院。傷口を塞ぐテープをちゃんと貼らなきゃいけないがめんどくさく、貼らない、薬も飲み忘れる。

傷口を早く治す薬はちゃんと飲んでけばよかったなと後悔しています。

ただ日焼けは良くないということだけは聞いて、ピンポイントで対策してたと思う。バンダナとかチョーカーとかで。

ホルモンの影響で太るから気をつけなさいと言われてたがちゃんと太った。

5 再発

先生が「とってしまえば大丈夫」というので、私は、がんをとっちゃえば、がん患者ではなくなると思ってました。けど、また手術することになった。再発なのか、元々取れなかったのが大きくなったのかわかりません。

がんが見つかったのは、成人式の次の日。この時も、特に驚かなかったけど、「めんどくさっ」とは思いました。何がどうなって、今の病院に転院したのか覚えてない。すぐ手術となったような気がします。

母の心配していた通りになった。

転院した病院は小さくて、専門の病院ってこともあって人が多い。福島から東京の病院に通うようになり、朝が早くてきつくなかったけど、もうこの時には、待たされるのも長い移動時間もどうでも良いと思っていました。いや、イラついてた時もあった。

2回目の手術は、意識があるうちに尿管のくだと、鼻に通すくだを入れました。とても綺麗な看護師さんだったのを覚えています。でも、鼻のくだが入らず、涙とか鼻水とか、顔から出る物は全部出た。

手術後より大変だった。

手術前の病室で、祖母が私に向かって手を合わせた。恥ずかしい。マジやめて。と思って、写真を撮りました。

麻酔から覚めると、今度は、点滴の針が入らず、また看護師さんにすごい迷惑をかけた。2、3人の看護師さんが交代し、初めてあんなに針を刺されました。申し訳ないなと思った記憶。看護師さんからずっと謝ってたよと言われました。

手術はリンパを大きく切り取ったので、耳の下まで傷口がありました。

でも、その時は、どんな手術か理解してなかった。傷口がなかなか塞がらず、退院後に、首から体液が流れてきたときは焦りました。

急遽、福島から東京の病院に行った。

手と足が硬直するようにもなった。気づいたのはトイレ。勝手に腫が上がり、変に力が入ってなのか立てなくなりました。

これは2回目の手術が原因だと思う。

病院のご飯は美味しかった気がする。手術後、病室が一緒だった方と少しお話ししてご厚意でアイスやスイーツを頂く連続で。

しかも高いハーゲンダッツ。

アイソトープ治療のことは全く覚えていません。何を思い出したら良いのか分からないぐらい。ただ家に幼いところが居たので、悪い影響があるかも、と心配して、すぐ家に帰るのを躊躇して、知り合いの紹介でお寺のお部屋をお借りしたのを覚えてます。

6 今

病気が見つかってからずっと、「健康調査」があるのは、県民の健康を気にしているのだなと感じていた。ありがたいことだなとかまで思っていた。

国なのか、県なのかは分かっていないけど、へーすげーなーと思ってた。

甲状腺癌が見つかる人が増えてるのをニュースで見る。その1人になる。

でも、それは「過剰診断」により見つかっただけであると流れる。では、何のために検査は行われたのか？

少しでもありがたいなと思っていた気持ちはどうなる？がっかりというか、残念でならない。

自分は、検査2回ぐらい拒否ってたくせに。複雑な気持ちです。

最近また再発して、3回目の手術の話が出た。

嫌な気持ちもあるけど、どちらかという母親に迷惑かけてばかりなのが申し訳ない。

ただでさえ薬を飲み忘れが多いのに、これからもずっと飲まないといけない。前までは飲まないのが日常だったけど、もう、飲むのが当たり前だから、

それに慣れるまでまだ、もう少しかかると思う。

漠然とした不安。

これから先のことも考えられない。今とか、未来とか、実際、やばい。

でも、私は病気になったのが、身内や友達ではなく、自分で良かったなと思ってます。友だちや家族が雇った方がつらいんじゃないかと思う。

今でも友だちが心配です。何も考えずに一緒に遊んでいた子。

これから、結婚とか、出産とかになっていくのに、まだ、甲状腺がんになる可能性はあるから、不安はのぞけてないんだよな～と思います。

裁判官の皆さんに対しても、甲状腺がんになったのが、あなたのお子さんでなくて良かった。そう思います。

裁判官の皆さんには、今もこれからも不安に思う人が 300 人以上いてその家族達も不安に思っていることを伝えたいです。そして、今の状況が少しでも変わればと思っています。

令和4年(ワ)第1880号 311子ども甲状腺がん裁判(損害賠償請求事件)

原告 1～6

被告 東京電力ホールディングス株式会社

意見陳述要旨 2022年9月7日 原告6

3ヶ月前の5月26日。

この裁判の1回目の口頭弁論がありました。

この日、私は生まれて初めて裁判所に入りました。

ついたての後ろの私の席からは、裁判官の横顔だけが見えました。

高校生の自分が、まさか裁判の原告になるとは思っていませんでしたが、原告席に座って初めて、自分が当事者なんだと実感しました。

私は、この裁判の1回目の期日が開かれる直前に、アイソトープ治療を受けるための入院をしました。

アイソトープ治療は、甲状腺を全部摘出した後、再発や転移を防ぐために、大量の放射性ヨウ素を服用する治療です。

私は高校3年生、17歳という年齢で、この治療を受けることになりました。中学生の時に甲状腺がんとなり、そして昨年、再発したからです。

裁判官の皆さん。 11年間の私の経験を聞いてください。

1 事故当時のこと

原発事故が起きたのは、私が幼稚園の年長組の時でした。家で昼寝をしていたとき、大きな地震がおそってきました。視界が大きく揺れて、色々なものが落ちてきました。

外の様子を見るために、母親と一緒に外に出たことを覚えています。

車であわてて避難することになった時、私は、ここにはもう戻って来れないかもしれないと思いました。

避難先の「スクリーニング」場となっている病院で、「どこからお越しですか」ときかれたので、家の場所を答えたら、履いているクツを脱がされ、スリッパをはかされて、放射線量を計測されました。

その時、対等人として見られていないような、疎外されているような感じがしました。

このときの経験がトラウマとなり、他の人に避難してきたことを隠すようになりました。

2 がんが見つかった時

中学校1年生の時に、学校で甲状腺エコー検査がありました。事故が起きてから3回目の甲状腺検査です。

診察してもらった時、エコーを見ている医者と看護師が私のエコーを見て何か話をしていました。エコーの機器を、何度もなんども甲状腺の部分に押しあてて診ていたので、不安な気持ちでいっぱいでした。診察が終わって教室に戻る時、私より後の順番だった人はすでに終わっていて、私がどれほど長い時間診察されていたのかがわかりました。

3 穿刺からガンと分かる時まで

ガンと言われた時のことはあまりおぼえていません。でも穿刺細胞診の検査のことはよく覚えています。その日は検査のため、中学校からの帰り道に直接病院に行きました。針を刺される前に、紙に名前みたいなものを書いたおぼえがあります。

その時に、一気に涙がぼろぼろでてきました。

「あ。今から首にはりを刺されるんだ。」と直感し、想像できない痛みに対する不安が、一気にあふれてきたんだと思います。怖かったです。初めてだったし、経験したことのないことをやるのだから。

検査では、診察台の上に寝かされて、細胞をとられました。目に入ってきたのは、細くて長い針でした。刺された時はあまりにも激痛で動いてしまって、2回も刺されました。

とても痛かったです。細胞に刺さったときは、なにか深いものにグサツと刺さった感覚がして、気持ち悪かったし、痛かったです。

どうして自分がこんなに痛い思いをしなくてはならないのだろうと思いました。その後、私はがんなのだと分かりました。

でも、その時、自分が具体的にどう思ったかはあまり覚えていませんが、ただ漠然とした不安だったと思います。私の体はどうなってしまうのか、入院するとなると、学校を休まなくてはならないのかなど、様々な不安がありました。

「ガンなんだ。そっか。入院するとなると勉強遅れてしまうな。」と考えていたと思います。

穿刺をしてからは、色々とおふっきれたのか、その頃から、なんだか自分が少し変わってしまったかもしれません。

4 1回目の手術のとき 1回目の手術は、何もかもが初めてでどきどきしていました。

なにより手術後が辛かった。最初は、全身麻酔が抜けていなくてすごく眠く、数時間後に目が覚めたけど、今度は体が動かさなくて、起きているのに何もできない状態が長時間続きました。その日はほとんど眠れなくて、不眠状態でした。それが数時間続いたので、精神的にも肉体的にもきつかったです。

絶対安静の次の日、1日ぶりに食事が出ましたが、ものを飲み込むとき、手術したところがあまりに痛くて、涙がぼろぼろ出ました。15分くらい頑張って食べてたのに、おかゆが2cmくらいしか減ってなくて悲しくなりました。

これからどうなっていくのか、手術後は、手術前と同じ生活を送ることができるのか。これからの不安で、眠れない日もありました。

5 2回目の手術のとき

がんの再発が分かったのは去年のちょうど今頃です。1回目の手術で甲状腺を半分摘出した際、「もう大丈夫」だと思ったのに、結局、もう一回摘出しなくてはならなくなりました。

2回目のがんの告知は、驚くこともなく、ただ残念に感じました。

1回目の手術の時は、中学2年生だったので、家族がずっと入院中、病室で付き添って来ていました。でも2回目のときは、コロナの影響もあり、家族との面会もあまりできなくて少し不安でした。何か体に異常があった時とか痛い時も、自分で看護師さんに言わなくてはなりませんでした。

2回目の手術は甲状腺がんを全て摘出し、かつリンパ腺まで摘出したので、摘出した右側の肩が上がりにくくなり、抜糸をした後は、首の右半分感覚がなくなりびっくりしました。手術から半年以上経ったので、いまはだいぶ感覚は戻ってきましたが、触るとなんともいえない鈍い気持ちの悪い感触です。たまに、つっぱるときがあってとても辛いです。後遺症に近いものがあると思います。

6 アイソトープ治療について

アイソトープ治療も受けることになりました。入院期間は1週間でした。最初は意外と短いなと思っていましたが、入院してみると、とても長い1週間に感じました。

薬を飲んだのは、今年5月。前回の裁判の少し前です。

午前中にシャワーを済ませて、午後2時20分頃に薬が投与されました。薬を飲む時、医師とはドア越しに対面した状態で、線量も測られました。

薬は、重い蓋のついた、ガラスの厳重な容器に入れられていて、厳重な注意を払って管理されていたので、「これを飲むのか」と、飲むのが怖かったです。薬を飲んだ後は、人との距離を取らなくてはなりません。そのことは頭で分かっていたのですが、精神的につらいものがありました。配膳の時も、テーブルを廊下側において、私はベッドの上で座って待つというスタイルです。

入院中、一度だけ、配膳の時に、ついテーブルの近くに寄って行ってしまったことがありました。すると、看護師に「近づかないで！」と言われたので、自分が人との距離をとらなくてはならない状態になってしまったことを感じて、暗い気持ちになりました。

薬を服用した後は、ただただ時間が長く感じました。ズーと壁を見つめる生活でした。

病室には備え付けのiPadがありましたが、ゲームアプリは入っていませんでしたので、ろくに使いものにならず苦痛でした。

薬を服用した翌日の夕方、のどの周りが腫れて、熱くなり、少し呼吸がしづらくなりました。こうした症状もナースコールで伝えることしかできず、のどの腫れは、どんどん悪化していったので不安でした。症状の変化を何回もナースコールで訴えているうちに、担当の先生が診にきてくれることになりました。本当はまだ距離を保たなくてはいけないのに、触診をしてくれた時は、申し訳なさを感じました。先生が回診に来る前、3時くらいに線量を計ったら、53マイクロシーベルトありました。30マイクロシーベルト以下になると退院できると教えてもらいました。

翌日は、朝起きたら声が異様なほどかすれていました。朝9時頃に先生の回診があったので、不安だった首の腫れと声のかすれのことを相談し、線量を測定しました。31.2マイクロシーベルトでした。

線量が低くなってきたので、予定通り翌日には、退院ができることが決まりました。

午後にもう一回線量を測定したところ、今度は24まで下がっていました。

退院は決まりましたが、その直前まで、のどの腫れは意外とひどく、薬を飲んでアイスノンで冷やしてい

ました。声もかすれていて、一時は声を出すのがつらいほどでしたが、徐々にだせるようになっていきました。これは薬の副作用なので仕方がないそうです。

入院中は、これらの副作用と病室でじっとする生活が続き、眠れるかどうか不安で、精神的にも身体的にも大きな負担がかかりました。

もう二度とこの治療は受けたくありません。

7 最後に

過酷なアイソトープ治療を受けた直後の5月26日、この裁判の1回目の口頭弁論があったので、体調面の不安もありましたが、裁判を傍聴するために、上京しました。

私は小学校に入る前に原発事故に遭い、以来11年間、小さなアパートで避難生活を続けています。そして13歳でがんになり、17歳で2度目の手術を受けました。

原発事故の時も、検査のことも、まだ小さかったので、何が起きているかよく分からず、覚えていることはほとんどありません。

自分の考え方や性格、将来の夢も、まだはっきりしないうちに、全てが変わってしまいました。

だから私は、将来自分が何をしたいのかよく分かりません。

ただ、経済的に安定した生活を送れる公務員になりたいと考えています。恋愛も、結婚も、出産も、私とは縁のないものだと思っています。

私にとって高校生活は、青春を楽しむというよりは、安定した将来のため、大学進学のために学校推薦をもらうための場です。友だちとの関わりも、深いつきあいは面倒なので、距離を置いています。

それでも、時々、勉強に対するプレッシャーや、将来への不安で、眠れないことがあります。

私は将来が不安です。

とくに、金銭面での不安が一番大きいです。18歳になって医療保険にも加入できなかった場合、これからの医療費はどうなるのか。病気が悪化した時の生活はどうすればいいのか。本当に不安です。

精神面でも不安はあります。

半永久的に薬を飲まなくてはならないし、ずっと今後も定期的な受診をしなくてはならないと思うと、なんとも言えない不安があります。

この裁判で、将来、私が安心して生活できる補償を認めてほしいです。

私が裁判官の皆さんに、一番伝えたいことは、今までお話ししたこと全部です。

◆別図 2011年7月27日 文部科学省及び栃木県による航空機モニタリングの結果 (C134,C137)
 (文部科学省がこれまでに測定してきた範囲及び栃木県南部における空間線量率)



